



東京有田会の歴史

～ふるさとへの思い、熱く～



大正ごろの東京有田会のメンバーと思われる写真
(前列 左から2人めが大塚為助さん)

過日、東京有田会の会員である泉山出身の深海孝さんが来館されました。埼玉県で焼き物商を営む深海さんは、有田町を中心に開催されていた新春新作展示会に参加され、そのついでに当館に立寄られたとのことでした。

深海さんは、平成28年に有田焼創業400年を迎えるにあたって、東京有田会で何ができるのか、ふるさとから離れて暮らす自分たちにできることを模索しているとのこと、そのアドバイスを、とのことでした。

当館でも、昨年末に有田焼や有田町の歴史探究に関わっている者のひとりとして、この節目に当って何ができるのかということについて九州陶磁文化館の担当者と協議したところで、すぐに回答はできませんでしたが、一緒に考えていきましょうと伝えました。

ところで、岩谷川内の正司家から当館へ寄贈された資料の中に、明治41年12月15日発行の「肥前協会同支部・軍友会知新会・佐賀県同郷実業会・佐賀郷友青年会会員名簿」があります。肥前協会は明治29年10月に設立され、その目的は「旧佐賀藩人並びに佐賀県人の一致協同を維持し其公共の利益を進むる」こととして、当時の東京市麴町区永田町1丁目75番地に事務所が置かれていました。会長は大隈重信、名誉評議員に小笠原長生、鍋島直虎、鍋島直映などの旧藩主が並び、評議員には久米邦武、松尾寛三、藤山雷太、森永太郎らが、通常会員に辻喜一、納富介次郎、久富安平、百田貞次など在京の有田関係者もいます。

では、東京有田会はいつごろ組織されたのでしょうか。以前、16軒の赤絵屋のひとり、白川の大塚為助の孫で、埼玉県川越市に住む大塚幹雄さんという方を訪ねたことがあります。

為助は明治2年、東京の陶工・服部杏甫がフラン

スのパリ万国博覧会で習得したフランス式の彩料による写真絵付法、油絵法、及び石膏型使用法などを伝授するということで、泉山の深海竹治、中の原の西山盛太郎、伊万里・大川内山の光武彦七などと共に百武郡令が選抜し上京したメンバーでした。

為助は有田には戻らず、横浜で陶器商を営んだ後、松尾儀助の起立工商会社に入社し、明治13年ごろに渡米しました。大塚幹雄さんは「お祖父さんの朝食はパンにハムエッグやオートミールという、当時としてはハイカラな食事でした」と思い出を語っていました。また、東京有田会のメンバーが写っているという写真も見せていただきました。撮影の日付は不明ですが、嘉永5年ごろに生まれた為助の晩年に近いものらしく、大正時代のものではないかと思われます。当時の顔触れはよくわかりませんが、それにしても古い歴史を持つ「東京有田会」です。

現在、東京有田会は山本兵蔵会長以下、会員は600余名。事務局は岩尾磁器株式会社東京支店内にあります。ふるさとを離れ、ルーツを共にする方々の有田への思いは熱いものがあります。400年に向けて大きなお力添えを期待しています。(尾崎葉子)



平成22年11月7日(日)、東京カトーデンパレスで開催された東京有田会の様子(梶原貞則さん提供)

皿 季刊 山

No.89

春

2011

有田町歴史民俗資料館・館報

太平洋を渡った有田焼 (上)

アカプルコの海岸風景

日墨友好 400 周年

5年後の2016年に有田焼は創業400年を迎えますが、最近、交流400周年を迎えた国があります。太平洋を隔てた対岸にあるメキシコです。なぜメキシコが、と思われるかもしれませんが、当時のメキシコはスペインの植民地でした。メキシコとの関わりはスペイン、そして、キリスト教との関わりでもあります。そのため、実際には日本とメキシコの最初の関わりは400年前よりももっと古く、例えば1597年に豊臣秀吉の命によって長崎で処刑された26人のカトリック教徒、いわゆる日本二十六聖人の中にもメキシコ人が含まれています。メキシコシティ近郊のクエルナバカの大聖堂には、当時の殉教の様子が壁画に残されています（写真1）。

それでは、今から400年前に何があったかと言いますと、それは一つの船の遭難の物語です。マニラの臨時総督だったドン・ロドリゴが、1609年にサン・フランシスコ号でメキシコに戻る途中、千葉県御宿沖で遭難して、地元住民に助けられます。そして、日本の援助で翌1610年にメキシコに無事に帰ることができました。その時にその船で日本の商人もメキシコへと渡っていきました。そのため、1609年を日墨交流400周年の起点としているわけです。ちなみに支倉常長ら慶長遣欧使節が渡墨するのは、その4年後の1613年のことです。

ガレオン貿易

大航海時代、スペインはポルトガルとアジア貿易の覇を競いました。アジアの産物を求めて、ポルトガルはアフリカ回りの貿易ルートを探り、スペインは大西洋回りのルートを探しました。

1492年、スペイン国王の命を受けたコロンブスはアジアとの貿易ルートを見つけるために大西洋を横断し、アメリカを発見しました。続いてマゼランが1519年にサンルーカル・デ・バラメダ港を出港し、南アメリカのマゼラン海峡の発見後、太平洋を横断してフィリピンに到達します。マゼラン自身はフィリピンでの戦闘で命を落としますが、部下たちはスペインに戻り、世界一周を達成したことはご存知のとおりです。

フィリピンに到達したスペイン人は、アメリカ大陸へ戻るルートも発見して、1571年にマニラに自分たちの都市を建設します。今もマニラ市街に残るイントラムロスです（写真2）。「壁の中」という意味で、文字通り、城壁に囲まれた都市です。ここを拠点に太平洋をまたぐアジア貿易を行うようになったのです。

メキシコから大量の銀をガレオン船でアジア市場に持ち込み、そして、陶磁器や絹などアジアの産物を満載して、太平洋を横断してアカプルコへと戻りました。19世紀まで続くいわゆるガレオン貿易です。



写真1 クエルナバカの大聖堂に残る26聖人殉教壁画
殉教図の上部にTAYCOSAMA（太閤様）の文字が見える。

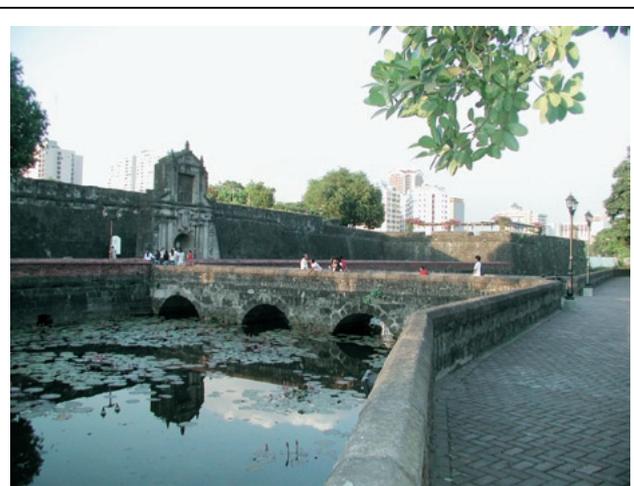


写真2 マニラのイントラムロス
スペイン人の拠点イントラムロスのサンチャゴ砦。



写真3 マニラ出土の有田焼

2004年に初めてマニラで確認された有田焼の17世紀後半の染付皿。(Courtesy: フィリピン国立博物館)



写真4 グアダラハラの大聖堂

「福地蔵人」の娘婿が執事をつとめたとされる大聖堂。二つの有田焼の金襴手の色絵壺が保管されています。

マニラで発見された有田焼

当館はここ数年、マニラやメキシコから出土した有田焼の調査を行っています。ガレオン貿易で運ばれた有田焼の実態を探るためです。

これまでオランダによるヨーロッパ輸出の研究は盛んに行われてきましたが、その他の国の船による輸出については研究が遅れていました。特に当時、日本と国交のないスペイン船によって運ばれた有田焼の研究はほとんど行われていませんでした。

その研究が進むきっかけとなったのは、2004年のマニラのイントラムロス出土陶磁器調査でした。フィリピン考古学がご専門の田中和彦さんのご協力で実現した調査でした。この調査で初めてマニラの出土遺物の中に有田焼を発見しました。それは17世紀後半の有田焼の染付皿の破片でした(写真3)。そこでフィリピン国立博物館と共同研究の覚書を交わし、陶磁器調査を継続して、これまで70点ほどの有田焼の破片を発見しています。

ガレオン貿易のアジア側の拠点であるマニラに輸入された有田焼の実態がわかると、次はメキシコ側の状況も知りたくなります。そこで2006年からメキシコ国内の出土陶磁器の調査を始めました。

メキシコに残ったサムライ

三度目のメキシコ調査となる2010年の秋、本格的な調査に入る前に訪ねたい町がありました。それはメキシコシティから高速バスで7時間のところにある、グアダラハラという町です。「西部の真珠」とよばれる美しい町でハリスコ州の州都でもあります。そして、ここはかつて「福地蔵人」という日本人が住んでいた町です。以下、彼について大泉光一氏の研究成果(大泉2004)を引用します。洗礼名は「ルイス」といい、前に触れた1613年の支倉常長の遣欧使節団に伴って渡墨したと推定されて

います。なぜ日本人とわかったかと言いますと、彼の契約書が残されていました。その契約書には日本語でしっかりと「伊すていん志よ(ルイス・デ・エンシオ)福地蔵人」とサインされていました。彼はこの町で商売に成功し、1666年頃にこの町で没したそうです。

ちょうど有田焼が誕生した頃に彼はメキシコに渡り、そして、有田焼が大量に輸出されるようになり、メキシコにも輸出されるようになった頃に亡くなっています。小売商であった彼が有田焼を扱ったかどうかは知る由もありませんが、この町の大聖堂に有田焼の色絵壺が2点残されていることが知られています。

グアダラハラの大聖堂の有田焼

福地蔵人の娘婿も大坂出身の日本人で、彼もまた商売に成功しています。そして、グアダラハラの地域の代官職や大聖堂の執事をつとめ、1675年頃に没し、大聖堂(写真4)に埋葬されたと言われています。

この大聖堂に2個の有田焼の色絵壺が残されています。ヨーロッパでも見られる金襴手の壺です。大泉光一氏は福地蔵人か、その娘婿が寄進した可能性を指摘していますが、おそらくそれは違います。これらは18世紀前半につくられたもので、彼らが亡くなった後に海を渡ってグアダラハラに持ち込まれたもののようです。

当時、メキシコでこの有田焼の壺に描かれた花の名を知る者はほとんどいなかったでしょうが、日本人なら誰もが知る花です。遠く祖国を離れて果てた彼らの靈魂を慰めているこの壺に、有田の陶工が牡丹の花とともに描いていたものは満開に咲き誇った桜の花でした。

(野上 建紀)

[参考文献]

大泉光一『メキシコの大地に消えた侍たち』新人物往来社2004

歩こう隊 外山編 活動開始

NPO 法人アリタ・ガイド・クラブとの共催で、平成 21 年から始めた「150 年前の有田皿山歩こう隊」の活動も、今回は対象地区を外山に広げ、前回から継続の方や、新たな参加者 7 3 名で 1 月から 5 隊に分かれて、活動を開始しました。前回同様、安政 6 年の「松浦郡有田郷図」や、文久元年（1861）の「南川原山図」などと、現在の地図を手にして、足で歩いて確認していく方法で調査を進めています。

地域の知られざる歴史や、隠れた史跡などを尋ね歩くこの活動に参加したいという方は、途中参加も受け付けています。有田町歴史民俗資料館までご連絡下さい。

陶石を採掘していた東府屋谷を調査中の黒牟田・応法隊



文化財防火デー開催

毎年、全国の自治体では地域に残る大切な文化財を火災から守ろうと「文化財防火デー」を実施しています。

有田町教育委員会でも、1 月 23 日（日）に国の天然記念物である泉山の「大いちょう」の周辺で火災が発生したという設定で、訓練を実施しました。地域の方や有田地区消防署、有田町消防団が参加し、樹齢千年と言われる大いちょうや周辺の伝統的建造物の家屋などを火災から守る訓練は、皆様の協力を得て、無事終了しました。



大いちょう周辺で、放水訓練を行う

町家で昔話を聞く会

開催しました

2 月 5 日（土）、有田町教育委員会生涯学習課と共催で、おはなしボランティア「ひこうせん」の八尋典子さん、林洋子さん、橋口由紀子さんの協力を得て、「町家で昔話を聞く会」を開催しました。

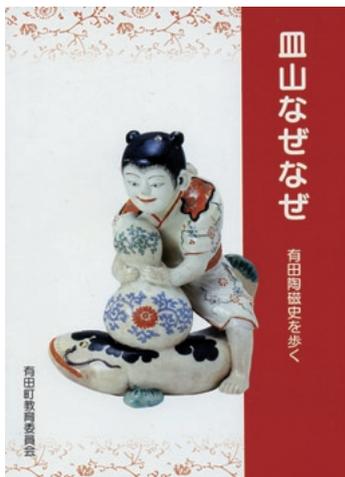
今回は上幸平の小路庵という、大正時代に建てられた町家（旧江副家）を会場にし、集まった子どもたちは 20 人。「黒髪山の大蛇退治」や「十二支の話」などを有田弁で分かりやすく話していただき、また「いのちをいただく」というちょっと重いテーマの本も語っていただきました。

お話が終わった後は、火鉢で餅を焼いて皆でぜんざいをいただきました。炭がくすぶり、目をしばたかせながらも賑やかなひとときでした。



お話を聞く子どもたち

新刊発行



皿山なぜなぜ

有田陶磁史を歩く

《販売場所》

- ・ 立部 有田町役場会計課
- ・ 岩谷川内 有田町役場東出張所
- ・ 大樽 有田陶磁美術館
- ・ 泉山 有田町歴史民俗資料館

《価格》

定価 700 円

有田町教育委員会では、前号でお知らせしていました「皿山なぜなぜ」10 刷目を、装いも新たに発行しました。有田町や有田焼の歴史を Q & A 形式でわかりやすく紹介しています。購入希望の方は左記でお求めください。

季刊『皿山』

通巻 89 号（平成 23 年 3 月 1 日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1
☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185